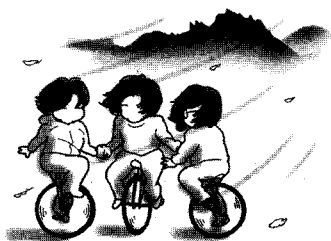


特集

子どもと風

からっ風にはぐくまれて

みよしのりえ



カット：みよしのりえ

「からっ風」の名産地、群馬県に住んで早二十二年になります。

からっ風というのは、この地方独特の、冬から春先にかけて吹く乾燥した冷たい強風のことです。日本海側からの季節風が山から吹き下ろすので、「赤城おろし」「榛名おろし」などとも呼ばれます。「かかあ天下とからっ風」という言葉をご存知の方もいらっしゃるでしょう。冬の風の強さに、群馬の女性のたくましさを重ねた言葉です。

群馬で子ども時代を過ごした人なら必ず知っている「上毛カルタ」にも、「雷（らい）」とからっ風義理人情」と謡われているように、上州を語るうえで欠かせない存在です。

私はこの土地で二人の子どもを育てました。といつても、まだ高校生と中学生ですから現在進行形ですが、幼児期・学童期を終えた今、改めて振り返ってみますと、ここで子育て期を過ごせたことは非常に幸運だったのではと気づかされます。私自身

は埼玉県で育ったのですが、同じ関東の隣り合わせの県であっても、気候や風土、方言などの違いはもちろん、住んでいて感じる空気感、人間関係の温度などに違いがあり、それらは子どもの成長にも何らかの影響を与えるのではないかと思うのです。

風に生まれる

私の子どもたちは、二人とも冬生まれです。一月と二月という、まさにからっ風最盛期の寒い日に生を受けています。

実を言えば、結婚してしばらくの間、私は子どもをもつことをためらっていた時期がありました。

結婚後まもなく実母を病気で亡くし、頼る人もいない土地で子どもを産み育てる自信がもてなかったのです。大学で児童学を学び、子ども会活動で多くの子どもたちと触れ合い、子ども好きを自認していたにもかかわらず、いざ自分の子どもをもつ段にな

ると腰が引けてしまう。非常に都会的で頭でっかちな状態だったのだと思います。

しかし、そんな後ろ向きな姿勢を徐々に前に向けてくれたのは、三十路目前という物理的要素と、それに何より、近所のお母さん方のおおらかで楽しい子育ての姿でした。

冒頭でも取り上げた「かかあ天下」という言葉、これはつまり「家庭で妻(母)が実権を握っている姿」ですが、この文化が群馬で育ったことは、群馬において養蚕業や繊維業といった女性の手先の器用さ繊細さが必要とされる産業が発達したことと無縁ではないようです。そして、それら産業の発達には、冬場のからっ風がひと役買っていることも忘れてはなりません。蚕の主食である桑の生育にも繭の管理にも、また絹織物の染色工程でも、冬の乾燥した気候はうってつけであったといえます。

女性は家庭の重要な働き手であり、子を産み育てる神々しい存在であると認めるこのよき風習は、からっ風がはぐくんできたと言っても過言ではないと私は思います。

風に育つ

さて、すっかり上州の空気に染まった私は、晴れて二人の子の母親となり、今日までの十五年ほどの間には、たくさんの地元の子どもたちとの出会いがありました。

ひとことで言って、群馬の子どもたちはとても元気です。特に女の子が活発なのは、やはり、かかあ天下の伝統ゆえでしょうか。

最近の子どもたちは、一緒に遊んでもそれぞれが携帯ゲームに夢中……などという話を耳にしますが、少なくとも私の周りには、そんな姿は全くありませんでした。外で暗くなるまで遊ぶのが基本。

夏の暑い日も冬の寒い日も、雨の日だってちゃんと濡れずに遊ぶ方法を知っていて、外で過ごしていました。からっ風の吹く日々慣れた子どもたちは、少々の悪天候には全くひるまないように見えます。もちろん個人差はあるのですが、全体的に子どもらしい、伸びやかな雰囲気をもっているというのが、彼らに対する私の印象です。

つまり、子どもが子どもらしく存在できているのです。

そんないかともかかあ

そんな当たり前のことが印象強く残る背景には、小学校受験や中学受験などとは無縁の環境があるのではないかと私は思います。

群馬県では、今のところ就学前や義務教育でのいわゆる「お受験」は、大都市周辺のように加熱していません。ほとんどの子どもが公立の小中学校へ進

みます。当然、塾に通う子どもも少なく、幼小の時期には十分に遊ぶ時間がもて、遊ぶ相手にも困りません。

これは私の持論ですが、子どもの教育には二つの節目があると思うのです。

一つは、「三つ子の魂百まで」のことわざにもあるように、三歳前後の時期です。この年ごろまでは無条件に愛情を注いで、親子の情を深めるべきだと思います。

そしてもう一つは、小学校四年生が目安の十歳前後の時期です。個人差はありますが、このころまでは、子どもは大人の意見を尊重して聞き入れますので、人格や社会性の基礎などをしっかりと築くための一つの節目だと思うのです。

そのような大切な幼小の時期を「子どもらしく」過ごせることは、現代にあつてはとても幸せなことのように思えます。

そして中学まで地元の公立校に通った子どもたちは、均等に選抜された仲間ではないさまざまな境遇の友人を得ることで人間関係に深みをもち、地元意識を高めて義務教育を終えることができます。

中学時代から地元に住みながら、受験のために地元を離れてしまった私は、残念ながらそういう意味での地元への愛着が育たず、成人式にも出席する気持ちになれませんでした。

しかし、私の子どもたちはおそらく、晴れやかに成人式に出席することだろうと思います。成人式は冬ですから、からっ風が吹き荒れているかもしれませんが、そこは皆、群馬の子どもですから、少しもひるまず、晴れ着に身を包んでおしゃべりに花を咲かす……。

そんな姿が今から目に浮かぶようです。

(イラストレーター)